

TOKYO人権

特集 01 「ホームレス」襲撃事件は
子どもたちの“いじめの連鎖” 北村 年子

特集 02 奮闘する“男性介護者”よ、手を取り合おう!

vol. **43** 2009.09

財団法人 東京都人権啓発センター

特集 01

TOKYO人権

「ホームレス」襲撃事件は子どもたちの“いじめの連鎖”

1983（昭和58）年の「横浜浮浪者殺傷事件」を発端に、現在も子どもや若者たちによる「ホームレス」襲撃事件は全国各地で起きています。東京都でも今年2月と5月、連続して江戸川区内で中学生による襲撃事件が発生。世間では加害者の残虐性ばかりにスポットが当たる中、野宿者と子どもたち双方の視点から現代社会の闇に光を当てて「ホームレス問題」に取り組むルポライターの北村年子さんに、お話をうかがいました。



北村年子さん

自分を肯定できない「生きづらさ」が「いじめ・襲撃」を生む



どうして「ホームレス」の問題に深くかかわることになったのですか？

子どもや女性の人権問題にかかわってきた私が、1997（平成9）年に『大阪・道頓堀川「ホームレス」襲撃事件』を上梓した後、読者の方々から「なぜそこまでホームレス襲撃事件にこだわるのか？」「野宿者の命を守る支援活動をしているのに、なぜ襲撃の加害者にもかかわるのか？」という声をたくさんいただきました。

23年前、私が中野区の中学生・鹿川くんのいじめ自殺事件取材し、その後、10代少女200人へのインタビュー集『少女宣言』を書きあげた時は、私自身「元・子ども」「元・少女」としての明確な当事者性がありました。

でも、私の中にずっとだれにも言えなかった、もう一つの当事者性がありました。それは、私が父を自殺で亡くした自死遺児だったということ。子どものいじめ自殺をなくしたいと活動してきたのも『少女宣言』を書いたのも、身近な人を失った被害者の立場として、「もうだれも死なないで」という痛切な思いがあったからです。

その後、日本最大の日雇い労働者の街・大阪の釜ヶ崎に呼ばれて行ったのが、野宿の人たちとの最初の出会いです。いま振り返ると私は、そのドヤ街で出会う野宿のおじさんたちに、「死なないで、どんな状態でもいい、

生きててほしい」と、無意識に父の姿を重ねながら支援活動をしていたんだと思います。

私が小学6年の夏、父は過労から腎臓を患って入院することになりました。でも、「病院はいやや」と言って、勝手に自己退院してきてしまう。なんで？と当時はわからなかったのですが、父は心の病、うつを抱えていたのでしょうか。でも、当時の私は父の弱さを受け入れることができず、毎日部屋の隅でゴロゴロしている姿にいらだちました。そして「逃げてる」「甘えてる」「もっと頑張れ」と、世間が野宿者を見るように、父を責めていたんだと思います。

ある日、父がふと「もう死にたい」と弱音をもらした時、私は「そんなに死にたいんやったら死んだらいい」って言ってしまったんですね。それから数週間後、父は住んでいた団地の踊り場から身を投げて命を絶ちました。

まさか本当に、父が逝ってしまうとは思わなかった。どうしてあの時、「そうか、しんどいやね。かまへんよ。生きててくれればいいよ」と言ってあげられなかったのか。「父を死の底へ突き落としたのは私だ」と、思いました。

結局、私がホームレスの人を殺めてしまった若者にかかわろうとするのも、私もまた過ちを犯した人間だと思って生きてきたからです。私の中に加害者と被害者、両方の自分がいたから、いじめや襲撃の加害者となった少年たちを責められなかった。私も同じ、私も間違ったよ、と。そして、父には言いたくても言えなかったこと、

してあげられなかったことを、野宿のおじさんたちにさせてもらっていたんだと思います。

Q なぜ若者たちは「ホームレス」の人たちを襲うのでしょうか？

1995年に大阪・道頓堀で63歳の野宿者が24歳の若者に川に落とされて亡くなりました。でも、加害者の青年（通称「ゼロ」）はだれよりも野宿者に親切に接していたと、彼の仲間たちは言う。そんな心優しくなかったはずの若者が、なぜ豹変してしまっただのか？ 取材や裁判で明らかになったのは、彼もまた発作性の持病のために、ずっと学校でいじめられ、社会でも就労差別にあい、安心できる居場所がなかったこと。そこには弱い者が、さらに弱い者を攻撃するという「いじめの連鎖」の構図がありました。

暴力は、怒りの爆発です。怒りというのは二次感情だから、その根っこには必ず一次感情がある。それは言葉にならないモヤモヤとした感情やストレスです。「つらい」「寂しい」「苦しい」といったマイナス感情を安心して言葉にできず、「頑張らなくちゃいけない」「こんなじゃダメだ」と抑圧するなかで、表に出てきた時には「イラつく」「ムカつく」と、怒りになる。この感情の爆発が暴力であり、それが弱い者へと向かうのがいじめであり、襲撃です。

もちろん、暴力は許されることではありませんが、加害者自身も過去のある時点で、必ず痛みの被害者となっています。だから一次感情の「心の声」を聞き、「つらい心」を受け止めてあげない限り、怒りを解消することはできないし、どんな人権教育をしたところで、いじめや襲撃はなくせません。ゼロくんたち加害者との出会いは、そんなことを私に教えてくれました。

不完全な自己を受け入れ 命の尊さを理解する「自尊感情」

Q 「いじめの連鎖」を断ち切るために 何が必要なのでしょうか？

ゼロくんはまだ自分に余裕があった時、野

宿者のおじさんたちに食べ物を分け与え、「しんどいけど頑張ろうな」と励ましていた。でも、仕事がなくなり、いくら面接へ行っても断わられるなかで「どうせ自分はダメなんだ」と自己否定し、自傷行為に走りました。それは「自尊感情（自己尊重感）」が、まさにゼロに等しい状態。その抑圧された怒りが限界を超えた時、自分とよく似た社会的弱者の野宿者へと、怒りの衝動が向かったのです。

いじめる側の心理をこう語ってくれた男の子がいました。「ぼくがいじめたくなるのは、いつも自分がつらいときでした。自分に価値があると思えないから、だれかを否定して攻撃することで、自分はましだと思いたくなります」と。彼もまた学校ですっといじめられてきた子でした。つまり、ありのままの自分を認められない、自分の価値がわからない、自分を大事に思えない「つらい心」が新たな暴力を生みだしている。

だからこそ“いじめの連鎖”を断つためには、格差・競争社会の変革とともに、個々の「自尊感情」を高めることが大切だと気づかされました。だれが何と言おうと、自分には価値があると思えるのが真の「自己尊重」です。それは他者に対して優越感を持つ尊大な「自尊心」とは違います。不完全な自分があるがままに受け入れ、許し、弱い自分も含めて受容する。そして他人の尊厳も同じように大切に「I am OK, You are OK.」という等価の精神が、すべての命は等しく尊いという認識につながっていくのです。

いじめや襲撃という「不幸な出会い」を 希望ある出会いへと変える

Q 「ホームレス問題」を考えるための 教育活動について話してください。

釜ヶ崎の民間の児童館「こどもの里」では、一月から三月までの毎週末、幼児から中高生の子どもたちが、野宿者におにぎりや毛布を配りながら話をする「子ども夜まわり」をしています。子どもたちは、野宿の人たちの凍てついた

心も魔法のように溶かすんです。大人の私たちが声をかけても「放っといてくれ」と自暴自棄になっている人も、子どもたちの言葉には涙を流したり「ありがとう」と言ってくれる。そして何度も会話するうちに、子どもは野宿にいたった人たちそれぞれの過酷な背景や物語を知る。「おっちゃんたちは、悪い人でも怖い人でもない。怠けてたわけでもない。一生懸命働いてきたけれど、怪我や病気やリストラ、いろいろな理由で働けなくなって社会から切り捨てられた」。

野宿の人たちと直接ふれあって学ぶ生きた情報、実体験ですから、どんな授業より、どんな書物より、はるかに得るものが大きいでしょう。

ところが、夜まわりをしていた子が、襲撃グループに加わり、補導される事件がありました。「なんで？」と非常にショックでしたが、話を聞くと、その子も学校でいじめられたり、貧困や家庭のしんどさを抱えていたそうです。いくらホームレスの人たちの事情や背景を理解している優しい子でも、いじめられたり、抑圧されたりする中で、襲撃事件の加害者となり得る。あらためて、私たち大人が、子どもたちのつらさを受けとめる「ホーム」となり、自尊感情を守り育てることの大切さを思い知らされました。

2008年の春、有志の仲間と「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」を発足させ、いま各地の学校現場で「ホームレス問題の授業」を展開しています。釜ヶ崎の「子ども夜まわり」をモデルにしながら、子どもたちと野宿者とは直接出会う場を設けて、お互いに理解し、人の命や人権を尊重するための学習を行います。

休むことを許されず競争を強いられ、受験や格差社会の中で追いつめられているいまの子どもたちは、たとえ住む家はあっても、学校でも家庭でも「ホーム・レス」です。「ホーム」とは、心が安心して帰ることのできる、ありのままの自分を受け入れてもらえる居場所のこと。私たちが本当に目指すものは、「ホームレス問題の授業」を通した“ホームづくり”です。

また、襲撃事件がくり返されるのは、大人たち自身の「ホームレス」への差別や偏見、排除

と無関心が最大最悪の要因であり、その意識が子どもたちに反映しています。大切な子どもたちを被害者にも加害者にもしないためには、まず大人たちが自らの差別意識を問い直し、変わっていく必要があります。そして親でなくても教師でなくても、私たち一人一人が出会う子どもたちの「ホーム」になれるよう願っています。

文 山川英次郎



TOKYO人権

北村年子さん
PROFILE

1962年、滋賀県生まれ。ルポライター、ノンフィクション作家。1987年、デビュー作『少女宣言』（長征社）が話題を呼ぶ。以後、女性・子ども・ジェンダーをおもなテーマに取材・執筆活動を進め、近年は「いじめ」「野宿者問題」についての講演や、虐待防止・子育て支援のセミナー、自己尊重ワークショップなども精力的に行っている。2008年、「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」を呼びかけ、共同代表となって立ち上げる。著書に『「ホームレス」襲撃事件と子どもたち』（太郎次郎社エディタス）、『おかあさんがもっと自分を好きになる本』（学陽書房）、『子どもを認める「ほめ方・叱り方」』（PHP研究所）、編著に『10代の言い分』（至文堂）など。

ホームレス問題の授業 教材DVD

「ホームレス」と出会う子どもたち

なぜ若者や子どもによる「ホームレス」襲撃が起きるのか？大阪・釜ヶ崎の「子ども夜まわり」の活動を軸に、野宿者と出会う子どもたちの変化、ホームレス生活を送る人びとの仕事や暮らし、その思いに迫る。

本編30分／応用編45分（予定）
 予価：2800円（税込・送料別）
 11月中旬発売
 お問い合わせ先：
 net@class-homeless.sakura.ne.jp
TEL・FAX
06-6645-7778（こどもの里）
 ホームレス問題の授業づくり全国ネット
<http://class-homeless.sakura.ne.jp/>



北村年子 著
「ホームレス」襲撃事件と子どもたち
 いじめの連鎖を断つために

太郎次郎社エディタス
 定価＝2,200円＋税

「道頓堀事件」から14年。子どもたちによる「ホームレス」襲撃はやまない。ときに命さえ奪う弱者嫌悪の根源に迫り続けたルポ。前著に大幅加筆した完全保存版。

information 01 東京都人権プラザからのお知らせ

特別展 「人と技術のいま 未来」

私たちの暮らしを支える技術。
人権分野と関わりの深い製品をご紹介します。

会期 **9月23日(水)まで**

入場料 **無料**

時間 **9:00~17:00**

会場 **東京都人権プラザ(台東区橋場1-1-6) 展示室**

URL <http://www.tokyo-jinken.or.jp/plaza/tenjishitsu.htm>

好評
開催中



メンタルコミットロボット「パロ」
© 産業技術総合研究所

お問い合わせ

(財)東京都人権啓発センター 普及情報課
TEL **03-3876-5372**

information 02

人権問題研修講師出講 事業のご案内

経験豊富で、時代感覚を備えた講師が
出講いたします。

研修内容

「基本的人権」「セクシュアル・ハラスメントの
防止」「同和問題」など、さまざまな人権問題に
対応します。

研修時間

3時間を原則としますが、1時間単位でも
受け付けます。

料金

1時間 **15,750円** (消費税込み)

お問い合わせ・お申し込みは
(財)東京都人権啓発センター
普及情報課

TEL **03-3876-5372**

FAX **03-3874-8346**

e-mail kenshu@tokyo-jinken.or.jp

information 03

9月は自殺対策強化月間です

～ひとりで悩まないで もっとあなたの声を聴かせてください～
東京都では、さまざまな機関が連携・協力して、自殺予防に取り組んでいます。

自殺総合対策東京会議のホームページ

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/tokyokaigi/>

生きる支援の総合検索サイト～ライフリンクDB～

<http://lifelink-db.org/>

相談窓口	電話番号	受付
東京いのちの電話	03-3264-4343	24時間
自殺予防いのちの電話	☎0120-738-556	毎月10日のみ 24時間
東京多摩いのちの電話	042-327-4343	10時～21時
東京自殺防止センター	03-5286-9090	20時～翌朝6時、火曜日のみ17時～翌朝6時
東京都夜間こころの電話相談	03-5155-5028	17時～21時30分
心の病気や悩みに関する相談		保健所や区市町村の精神保健相談窓口で受け付けています。
東京都生活再生相談窓口(多重債務者生活再生事業)	03-5565-1195	9時30分～18時 月～金
TOKYOチャレンジネット(住居喪失不安定就労者サポート事業)	☎0120-874-225	10時～17時(月・水・金・土) 10時～20時(火・木)
東京都若者総合相談(若ナビ)	03-3267-0808	11時～20時 月～土
いじめ相談ホットライン	03-5800-8288	24時間
ひきこもりサポートネット	042-329-6677	10時～17時 月～金

お問い合わせ

東京都 福祉保健局 保健政策課 TEL**03-5320-4310**

information 04

東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

●団体賛助会員 一口 **30,000円** ●個人賛助会員 一口 **2,000円** (ともに会員期間は4月1日から3月31日までの1年間です)

特典

- ・「TOKYO人権」や行事の事前案内などをお送りします。
- ・「TOKYO人権」やセンターのホームページに団体会員名を掲載いたします。

お問い合わせ先: (財)東京都人権啓発センター 総務課
電話: **03-3876-5371**

団体賛助会員の皆様

(株)東京交通会館

(有)東京エイドセンター

東京M X テレビ

(財)東京都交通局協会の

東京地下鉄(株)

(社)板橋区シルバー人材センター

(財)東京都弘済会

東京都住宅供給公社

東京都下水道サービス(株)

(株)日本アクセス

(財)東京都中小企業振興公社

(学)高宮学園

東京都職員信用組合

東京電力(株)

(株)コミュニチュア

荏原ユーザライト(株)

(株)プランニング・ヴィ

(財)住宅管理協会関東支部

(有)関東紙業

(順不同)

奮闘する“男性介護者”よ、手を取り合おう!

最近、“男性介護者”という言葉をよく耳にするようになってきました。あえて“男性”が付いていることからわかるように、この言葉は「介護の役割は女性のもの」と思われてきたことをあらわしています。しかし今日、全国の在宅介護者336万人のうちの109万人、およそ3分の1が男性なのです。

いまや男性が家庭で介護をするのは「ごく当たり前のこと」ですが、男性介護者特有の困難さがあるといえます。また、今年に入って男性介護者の全国組織が設立されるなど、男性と介護の問題がクローズアップされてきています。

日本で最初の男性介護者の会

高齢者についてのわが国初の実態調査がおこなわれた1968(昭和43)年の時点での「在宅介護者」とは「嫁・妻・娘」などで、男性が介護者として意識されることはありませんでした。その後1980年代までは、介護者に占める男性の割合は10%前後を推移。しかし1990年代増加に転じ、主な介護の担い手も“嫁”から配偶者や実子に移行しました。この時期、2000(平成12)年の介護保険制度導入へいたる「家族による介護」から「介護の社会化」への政策転換、核家族化・少子化傾向などの要因により、男性介護者が増加したとされています。

1990年代初頭から先駆的な活動をしてきたのが「荒川区男性介護者の会(オヤジの会)」です。代表の荒川不二夫さんが奥さんの介護をしていたときにできた人脈が元となり、数人の男性介護者やソーシャルワーカーなどで、1994年に団体を立ち上げました。現在の会員は30名前後、荒川区だけでなく都内全域



始終にこやかなオヤジの会代表の荒川不二夫さん(81歳)は、実は昨年末に倒れた息子さんの介護中。「毎日が漫才みたいに楽しくやっていますよ(笑)」

から集まっています。うち10名程度が訪問看護師・社会福祉協議会職員・ケアマネージャーなどからなる賛助会員です。

荒川さんは「オヤジの会」設立の動機を「男は見栄っ張りだから、なかなか愚痴も言えなくてストレスが貯まっちゃう。お酒が入ると、やっと少し話ができるんだけど。だから、腹を割って介護の悩みをうち明け合える場が必要だったんですね」と説明してくれました。

男性介護者特有の問題として、「弱音を吐いたり愚痴を言うのを潔しとせずストレスを貯めがち」「助けを求めるのが苦手で、一人で責任を背負い込みすぎる」などといった傾向があるといえます。

このことを反映するかのよう、高齢者虐待の加害者は息子と夫が1位と2位を占めており、介護疲れの末の心中・殺人事件では、加害者の4分の3が男性、という深刻な統計も出ています。

「人に話を聞いてもらう、同じような境遇の人の話を聞いてみる。それだけで気持ちが軽くなることもあるんですよ」と語るのは、現在、お母さんを介護をしている「オヤジの会」会員の神達五月雄さん。家族を介護するためには、まず自分自身の健康状態を肉体的にも精神的にも保たなければいけないといいます。

介護の忙しさから介護者は外出もままならない状況であることが多々あります。必要な役所での手続きや日々の買い物にでかけるのさえ困難ですから、「オヤジの会」に出席するのも一苦労です。

「集まりに参加できるように自分の介護環境を整えてみてください。行政や社会福祉協議会、ケアマネージャーなどに相談すると良いですよ」(神達さん)。

男性介護者特有の問題としては「それまで家事をし

たことがなかったために炊事・洗濯ができない」「長い会社勤めのせいで地域社会との関わりが薄く孤立しがち」といった、技術や経験にもとづく問題もあります。しかし一方で、勉強熱心なものも男性介護者の特長だそう。「オヤジの会」では懇親会と同時に外部講師によるさまざまな勉強会も開催しています。「お酒の席でも、ここをこう変えたら良くなるんじゃないか」というような建設的な意見が出る。こうした積み重ねをもっとみんなで共有していきたいですね」（荒川さん）。

男性介護者よ、日の当たる場所へ出よう！

都内の男性介護者はおよそ11万人と推計されます。男性介護者は決して少数者ではありません。しかし、都内の男性介護者団体はいまのところ「オヤジの会」だけだといえます。

更に男性介護者の問題の一つとして「仕事を辞めて介護だけしている自分自身を認められない」「介護している姿を他人に見られたくない」という心の持ちようが指摘されています。いまのところ「オヤジの会」以外の男性介護者の活動が都内で広がりを見せない理由は、こういったところにも原因があるのかもしれない。

理由はともあれ、介護することは男性にとって恥づかしいことなどではありません。1999年に高槻市市長の江村利雄氏が「亭主の代わりはないけれど、市長の代わりはある」と言明、妻の介護を理由に辞任しました。あのとき江村氏の決断が、大きな驚きとともに好意を持って迎えられたことは今も多くの人たちの記憶に残っているのではないのでしょうか。

「オヤジの会」の賛助会員で看護師の松村美枝子さんは、孤軍奮闘している男性介護者たちにこう呼びかけています。「会に出れば有益な情報がたくさんあるし、仲間に出会えるし、ためになりますよ。今のつらい状況をなんとかしたいと思っているならば、あなたがまず変わらなくては!」。

広がる男性介護者の輪

2009年3月、男性介護者の会や支援活動の交流、情報交換の促進、家族介護者支援についての総合的な調査研究などを目的として、「男性介護者と支援者の全国ネットワーク(男性介護ネット)」がついに発足しました。代表にはオヤジの会の荒川さんが就任。現在、京都市に拠点を置いて活動しています。

現在の会員数は250人で、会員の9割以上が男性介護当事者や経験者です。団体会員としては10団体が所属しており、そのうち男性介護者当事者のグループは「荒川区オヤジの会」のほか、兵庫県宝塚市の「NPO法人スマイルウェイ」、長野県の「シルバーバックの会」の3団体です。男性介護者団体が全国にどのくらいあるのかは「男性介護ネット」でも把握はできていませんが、その数がまだ少ないことは確かなようです。しかし、一部の自治体や社会福祉協議会でも男性介護者のための集いを計画するなど、男性介護者の輪は少しずつではありますが、全国に広がりつつあります。

「男性介護ネット」では、全国の情報を集約し発信していくほか、交流会や男性介護者のための講座なども開催しています。今後は政策提言もしていけるよう準備中とのこと。

介護者のおかれている状況が良くなるということは、すなわち介護を受けている人たちのためにもなるということです。広がりつつある男性介護者のさまざまな動きが介護・福祉の向上に一役買うことを期待しましょう。

荒川区男性介護者の会(オヤジの会)

奇数月に男性介護者のつどい、偶数月に勉強会と懇親会をおこなっています。

講演会「介護をめぐる問題について(仮題)」

講師:津止正敏氏(立命館大学教授、男性介護ネット事務局長)

日時 平成21年11月7日(土)

※詳細はお問い合わせください。

問い合わせ先 荒川区社会福祉協議会

TEL:03-3802-2794 FAX:03-3802-3831

男性介護者と支援者の全国ネットワーク (男性介護ネット)

<http://dansei-kaigo.jp/>

オヤジの会の情報も随時掲載されます。



経験と知恵がつまった

「男性介護者100万人へのメッセージ 男性介護体験記」を発行しました。

購入希望は下記まで。

問い合わせ先

TEL:075-811-8195

FAX:075-811-8188

メール:info@dansei-kaigo.jp

リレーTalk

DAISUKE NIWA



地域精神保健福祉機構コンボ
出版事業担当
丹羽大輔さん

TOKYO人権

精神障害を抱える人が 元気に生きる社会の“しくみ”作り

精神障害を抱える当事者は治療・ケアされる側として受け身の立場に置かれがちです。そんな中、NPO法人COMHBO(コンボ)では、精神障害に対する偏見がつきまとう現状を打開するために、当事者の視点を中心に据えた活動を続けています。NPO設立の経緯やその活動の一環であるメンタルヘルスマガジン『こころの元気+ (プラス)』について、出版事業担当の丹羽さんにお話をうかがいました。

これまでの精神保健福祉の支援活動は、医師や看護師、精神保健福祉士(PSW)、患者さんやそのご家族の方々など、職能・立場によって分かれていました。しかし、精神保健福祉の“質”を底上げしていくためには、職能や立場にとらわれない横断的な活動も必要だと、私たちは感じていました。そのような背景のもと、限界にとらわれずに思い切った活動ができる組織を目指し、2007(平成19)年にNPO法人COMHBO(コンボ)を設立しました。

柱に据えたのは「精神障害を持つ人たちが主体的に生きていくことができる社会のしくみを作りたい」。ここで言う“しくみ”とは、社会制度だけでなく、精神障害に対する一般的なイメージや偏見なども含めた現代社会全体のことで。

精神障害を持つ人たちは、様々な不安を抱えています。「電車に乗るのが怖い」「他人の視線が気になる」など、第三者にはとるに足らない些細なことでも、当事者にとっては深刻な問題である場合があります。精神障害特有の症状が周囲には理解されにくいいため、そのやるせなさから自己肯定感や活力を失いがちです。じつは私自身も、うつ病を患ったことがあるのでわかりますが、特に具合が悪い時には「自分はなんて役に立たない人間なんだろう」というマイナス思考に陥りやすいのです。

こうした中で、私たちができることは何かを考えた時、“しくみ作り”の一つとして、当事者の視点を中心にした雑誌を作ろうというアイデアが出てきました。それが『こころの元気+ (プラス)』という月刊誌です。本誌は執筆者の約7割が精神障害を抱えている当事者であるのが特徴です。メンタルヘルスに関する信頼できる最新の医療情報も掲載していますが、それだけなら他にもたくさんの雑誌があります。しかし同じ病気の人たちがどうやって病気とうまくつきあってきたのかというような体験談は、これまではなかなか読むことができなかったのです。当事者の方からは「他

の人の体験記を読んで勇気もらった」などたくさんの声をいただいていますし、ご家族からも「あらためて病気に対する理解が深まった」という感想が寄せられています。

「当事者が主役」であるという創刊主旨を最もよく表しているのが表紙写真なのですが、なんと、当事者の方々が毎号のモデルをつとめているんですよ！ このことは関係者やメディアも含めてかなりの衝撃だったようで、今も大きな反響が続いています。モデルさんたちの表情から「病気を隠さないで、こんなに明るく、元気に生きていけるんだ」というメッセージがよく伝わるのではないのでしょうか。読者から公募しているのですが、私たちがもびっくりするほどたくさんの希望者が集まっています。

かつてのように病院に入院したままではなく、現在は医療の進歩によって地域で普通に暮らせる人がどんどん増えています。病気とつきあいつつ、前向きに生きる。自己肯定感を上げることで、元気になる——こうして当事者自身の「できること」を増やしていけば、それにともなって社会の“しくみ”は必ず変わっていくはずで。今後も当事者の視点を中心に据えるという基本を大切に活動を続けていこうと思っています。



メンタルヘルスマガジン
こころの元気+ 7月号

問い合わせ先

NPO法人
地域精神保健福祉機構
COMHBO(コンボ)
〒272-0031
千葉県市川市平田3-5-1
トノックスビル2F
TEL:047-320-3870
FAX:047-320-3871
ホームページ:
<http://www.comhbo.net/>



財団法人東京都人権啓発センター

〒111-0023 東京都台東区橋場一丁目1番6号 東京都人権プラザ内
TEL.03-3876-5372 FAX.03-3874-8346 <http://www.tokyo-jinken.or.jp/>

「TOKYO人権」は都内図書館、区市町村窓口などに配布しています。

「TOKYO人権」ご希望の方へ

「TOKYO人権」は年4回発行しています。ご希望の方は、普及情報課までご連絡ください。